

谷田貝常夫先生を偲ぶ

土屋 博

谷田貝先生ご逝去との訃音に接し驚愕致し候。

NPO法人文語の苑にとりてもただただ痛恨の極みといふほか之無く候。

振り返るに、先生、約二年前に文語の苑の理事職を申し出によりて退任せられ候。

その際の退任願に先生曰く、「小生、脳梗塞からの視野不調にて、様々なる分野にての調整がとれにくくなつてをります。見えてみて見えないのが實情で、PCも見えはするもの入力間違ひやら、見落しやらが多く、多くの時間がとられ、ために仕事は漸次縮小することにしました。そのやうな事情故、文語の苑も役職は抜けさせていただき、顧問として、できる範囲内での御協力をさせていただけるやう、御願ひ申しあげる次第です。敬白」と。體調の優れぬにも拘らず、文語普及への情熱は止み難く、誰にも負けぬものありと拜察申上げ候。引き續き文語の苑のテキストのPOD版制作作業、毎年の會報制作などについて、ご指導を仰ぎたる處に御座候。本の制作に關する永年のご経験を、惜しげも無く文語の苑の爲に披瀝せられたることは、感謝申上ぐるほか之無く候。

谷田貝先生は一九三二年生れ、英米文學翻譯家、東京大學文學部卒。永らく國語問題協議會事務局長・理事長を務められ、いつも我が國の國語問題の將來のことを憂慮せられ候。芥川龍之介と同窓の旧制三中（兩國高校の前身）のご出身と仰られしと記憶す。福田恆存研究の第一人者として福田恆存語録「日本への遺言」を編輯せらる。普連土學園の先生にてもあられ、幻の名著「國語讀解・要約法」は古書として高値なりしかど、谷田貝先生ご自身によりごく最近復刻せられたるはまことに悦ばしきことに候。

谷田貝先生の文語の智識の他に卓越せることはいふもさらなり。古今東西の教養に滿ち溢れ、文語の使ひ手として超一流の第一人者と言ふべし。年下の我々に對しても隔て無く優しく接して下され候。ただし、舊假名遣ひ使用への拘はりには強き信念も垣間見候。

その關心領域は國語問題以外の内外の藝術全般多岐に互れり。

幸ひにも文語の苑のホームページには讀みきれぬほどに膨大なる先生の玉稿のアーカイブあり、特に日々廊にあるエッセイはいづれも魅力的なる名文ばかりに候。ご専門の蕪村に關係するもの、トロイアの遺跡發掘にて有名なるハインリッヒ・シュリーマンの一八六五年幕末期江戸訪問記の話、食通にてもあらければ倫敦の「ドーバーソール」の話題など興味深きものに候。また、文語の苑の初期メルマガにて連載せられたる文部省唱歌の解説（ふるさと、七里ヶ濱、みがかずば等）は一冊の本とせずば勿體無きほどの絶品と思料致す次第。

小生、生前を偲ぶべく、二〇二二年十一月文語シンポジウム「鷗外譯即興詩人の魅力」

（於・東洋大學）にての谷田貝先生のご勇姿を改めて拜見致し居り候處、感慨一入に候。公私とも種々お世話に相成り、想ひ出は盡きねど、次の世代に文語を繋いで行くことをお誓ひ申上げつつ、茲に深甚の感謝を述べると共に、先生のご冥福を心よりお祈り申上げ候。



（令和四年三月六日受附）

文語の苑月例幹事會に於ける谷田貝先生